

Tilke, Max. Studien zu der Entwicklungsgeschichte des orientalischen Kostüms. Berlin, von Ernst Wasmuth A.—G., 1923. 71p. with illus. 31.7×23.8 cm <383.1-T>
Hiler p. 846 Colas 2877

北アフリカ、東アフリカ、エジプト、ナイル河流域をも含む古代オリエント諸民族の服飾発展の歴史を簡潔かつ系統的に論じており、図も豊かである。ティルケは先に著した『東洋服飾の型と色』*Orientalische Kostüme in Schnitt und Farbe* <383.1-T>では、シリア、ペルシャ、チベット、中国、日本などの民族服の形態を詳しく示すと共に、その色彩を再現しているが、本書では、古代オリエントの服飾に関する理論的基礎づけがなされ、衣服の基本的型式が、関連づけられながら述べられていて先の図集を補完するものとなっている。

特に巻衣について考察し、東洋では縫製服に先立って着用されており、記念碑にもよく描かれている。著者は、ここで、現在でも着用されている巻衣についても、できるだけ完全な知識を得るため、また、これらの最も容易な着方を知るため、たゆまない努力をしたことを記している。「若いころから博覧会やショーに出てくる様々な異民族の集団に特別な関心をもち、彼らがどのようにしてその肢体に大きな布を巻きつけるのかを観察したり、また、自ら布を手に入れて彼らのまねごとをやったりして、実際の民族衣装に関する知識を得た。また、数々の旅行に際しても、モロッコ人やアルジェリア人が外衣を身に着ける方法にも違いがあることなども観察することができた。ここに現わした基本的な考察をもとに、読者自らが絵を描いたり、裁断をしたり、あるいは、塑像のモデルを作ったりして共同作業に加わらなければ本書の目的も完全には達成されない。」と述べている。

本書は16章から成り、ほぼ発展段階順に構成してある。巻末には、東洋の主要な衣服型式とその系譜が添えられている。図版はローゼンベルク (A. Rosenberg) の *Geschichte des Kostüme* (41) に描いたティルケ自身のものによっている。(平井)